

【社説】中国人や日本人も安重根記念館のため寄付したのに

中国ハルビンで百貨店や不動産業を営んでいる中国の実業家・蔣賢云氏が一昨日、ソウルの南山公園に新築される安重根(アン・ジュンゲン)記念館の建設に役立ててほしいとして、安重根義士崇慕(すうぼ)会に3000万ウォン(約232万円)を寄託した。蔣氏は「安義士は韓国人だけでなく中国人、ひいては世界の英雄。記念館を建てるのに少しでも足しになればと思う」と語った。蔣氏に先駆け、島根県で中小企業を営んでいる小松昭夫氏や牧野英二・法政大教授も安重根を尊敬し、記念館の資金を拠出した。

今年は、1909年10月に安重根がハルビン駅で朝鮮侵略の元凶・伊藤博文を射殺してから100年目に当たる。安重根は「わたしが伊藤博文を殺したのは、独立戦争の一部だ。わたしは個人の資格ではなく、大韓義軍参謀中將の資格で祖国独立と東洋平和のために行った」と堂々と主張し、翌10年3月に旅順監獄で殉国した。

安重根義士記念館建立委員会は、安重根の義挙100周年から殉国100周年へと続く意義深い時期に合わせ、安重根記念館の新築を推進してきた。建築から39年たつ現在の記念館は広さ590平方メートルで、古くて狭いため、観覧客が30人入るのも難しいありさまだ。その場所に、延べ面積3799平方メートル、地上2階、地下2階建ての新たな記念館を作ろうというわけだ。予算150億ウォン(約11億6160万円)のうち、130億ウォン(約10億670万円)は国庫から、残り20億ウォン(約1億5500万円)は韓国国民の募金で賄われる予定で、2006年から募金運動が繰り広げられてきた。

募金には7月末現在で4835人が参加し、11億2250万ウォン(約8692万円)が集まった。全国経済人連合会や、錦湖アジアナグループ、(株)ファースなど企業も参加しているが、市民の参加も少なくない。賃貸マンションに一人で暮らす70歳の女性は、子供がくれた小遣いを貯め、50万ウォン(約3万8700円)ずつ2回寄付をした。晋州・鳳源中学校の生徒950人余りは、歩け歩け大会を行い集めた約80万ウォン(約6万2000円)を寄付した。しかし、昨年末から景気が悪化したことを受け、企業や市民の参加が減ってきているという。

安重根記念館の建設は、たとえ募金額は少なくとも、より多くの国民が参加すればそれだけ意義が深まる事業だ。外国人ですら安重根に対する尊敬の念を示し、建設資金を出している。韓国人一人一人が、安重根記念館にレンガを一つ贈る気持ちで参加すべきだ。